

寝たきりで認知症のノブさん(ふじ)は、眠っている時間が増えた。目を覚ましたのを見計らって、娘さんが年齢を尋ねると、小さな声で「ひゃく」。娘さんは「さっきは八十って言ったのに…」

# 医人伝

と吹き出した。

在宅ホスピスケア―住み慣れた自宅で、病気を問わず、最期まで暮らせるように支えることが、遠藤太久郎さんの願いだ。午前中は内科・心療内科の外来。午後は各家庭を回り、時間をかけて患者や家族と接す

る。「必要なのは、ハイテクの医療技術よりも、精神的な支え。うそをつかず、『そのやり方で大丈夫』という思いを伝えていきます」。枕元に携帯電話を置き、夜中のコールにアドバイスする。約五十人の在宅患者のうち、進行がんの人は、常時五人前後。痛みの管理には点滴よりも貼り薬や水薬を使う。その方が患者や家族が対処しやすいからだ。

いせ在宅医療クリニック (三重県伊勢市)

## 院長 遠藤 太久郎さん (62)

考える勉強会などに使っている。「医師ではなく、一遺族としての思い」がこもった場だ。

二十二歳のとき、父をがんで亡くした。名古屋大法学部卒業直前だった。一般企業に就職したものの、父の死に「割り切れない理不尽な思い」をずっと引きずって

いた。それが「医療の裏側を見たい」という気持ちに



認知症で寝たきりの女性を診察する遠藤太久郎さん

患った。三重県こころの医療センターに勤めた時は、アルコール依存症の患者や精神疾患の家族と接し、心のケアの大切さを痛感した。在宅ホスピスへの思いが強まり、先輩医師を訪ねたり、海外研修に出掛けたりした。信頼していた同僚看護師が末期がんになり、在宅でのみとりに関わった経験も、開業の後押しとなった。

大医学部に入った。内科の勤務医時代は、患者の立場と程遠い医療に疑いを感じます」

(編集委員・安藤明夫)

# 「大丈夫」を伝えたい